赤外線テレビカメラ装置を利用しても、文字の判読は不可能であった。

なお、本木簡の判読にあたっては、奈良国立文化財研究所の舘野和己氏・渡辺晃宏氏・吉川聡氏、関東学院大学の田中史生氏、島根県立博物館の平石充氏、島根県埋蔵文化財調査センターの熱田貴保氏からご教示、ご協力いただいた。

（江川幸子）

(1)

島根・喜時雨（きじゅう）遺跡

1 所在地　島根県鹿足郡津和野町大字田二穂
2 調査期間　一九九八年（平10）七月～一二月
3 発掘機関　津和野町教育委員会
4 調査担当者　宮田健一
5 遺跡の種類　集落跡
6 遺跡の年代　一二世紀後半～一八世紀
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

喜時雨遺跡は津和野城の西麓、中世津和野城の大手口があったと伝えられている地区にある。遺跡の主体は中世武士団の集落跡と考えられ、この地域の領主となる吉見（よしみ）氏が津和野城周辺に館を移したと伝えられている嘉暦二年（一三二七）以降の遺構と、それ以前の在地領主層による遺構の大きく二時期に分けられる。

木簡は、集落の縁辺部に相当する調査区北西隅の木

（津和野）

棺墓（四―SX二）から出土した。木棺墓は、墓壙（一三七×九五×二五㎝以上）に木棺の棺材（九二×五五×二三㎝以上）がほぼ完全な状態で遺存していた。木簡は、土圧で皿状に落ち込んだ棺材蓋板上、東辺中央部付近に横たわって出土した。供献品として、木棺外南西隅からは伏せられた曲物とその上に伏せられた漆器椀が、また木棺外北東隅からは竹筒の上に漆器が横たわって出土した。棺内からは、頭蓋骨片、歯冠三、数珠玉五九（水晶玉四〇・白色玉四・木製玉一五）、銅銭一四枚（咸平元宝一・祥符元宝一・祥符通宝五・天禧通宝三・不明四）が出土している。頭部付近からは有機質塊が出土しており、分析の結果イネの穎（稲籾）であることが判明している。

供献された漆器漆絵は、概ね一三世紀～一四世紀の特徴を持つと考えられ、曲物底板の年輪年代測定では、やや統計的な確率が低いものの、一二六一年を上限とする伐採年という結果が出ている。これらのことから、木棺墓の時期は概ね一四世紀と推定されよう。

8　木簡の釈文・内容

(1)　□禅定尼　□□」　(239)×44×7　019

墨書は表面のみで、成人女性を指し示す戒名の一部と考えられる。木簡の材質はスギで、上端を欠損している。木簡下端の約三㎝の遺存状況が比較的良好であることから、卒塔婆としてこの部分が土中に埋められていた可能性がある。

（赤外線画像　部分）

今回の報告に当たり、島根県埋蔵文化財調査センターの赤外線テレビカメラ装置を使用させていただき、同センターの深田浩氏・島根県立博物館の平石充氏からご教示を得た。年輪年代測定は、奈良国立文化財研究所光谷拓実氏のご協力を得た。

9　関係文献

津和野町教育委員会『喜時雨遺跡』（二〇〇〇年）

（宮田健一）